

5 高等学校における道徳教育(平成 24 年度広島県教育資料から抜粋)

道徳教育は、豊かな心をもち、人間としての在り方生き方の自覚を促し、道徳性を育成することをねらいとする教育活動であり、社会の変化に対応して生きていくことができる人間を育成する上で重要な役割をもっている。

高等学校における道徳教育は、人間としての在り方生き方に関する教育であり、公民科やホームルーム活動を中心に各教科・科目等の特質に応じ学校の教育活動全体を通じて、生徒が人間としての在り方生き方を主体的に探求し豊かな自己形成ができるよう、適切な指導を行うことが求められている。

特に、高等学校においては、小・中学校と異なり道徳の時間が設けられていないこともあって、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の指導のための配慮

<高等学校における道徳教育推進のポイント>

- 教職員間での道徳教育に係る共通理解を図る。
 - 計画的・継続的な指導を行うための組織づくりを行う。
 - 推進上、基軸となる機会と場を設定する。
 - 固有の指導内容・指導方法、教材を開発する。
- ※小・中学校の道徳教育を基礎として
- 自己の生き方を社会とのかかわりで探求させる。

が必要である。「高等学校における道徳教育推進のポイント」を踏まえ、学校の実態や生徒の発達の段階等にふさわしい教育活動を行うことが大切である。

高等学校における教材の開発やその活用(例)(県立西条農業高等学校の取組)

西条農業高等学校では、農業教育を通して、生命の尊さを学び、自他の命を尊重する態度と豊かな心を育む道徳教育の推進をめざしている。

【具体的な取組事例】

○教材の開発

教材開発に当たっては、全教職員による一貫性のある道徳教育が組織的に展開できるよう留意し、全教職員が参画し、特別活動(ホームルーム活動)で活用できる読み物資料を作成した。

○教材の活用

活用にあたっては、教師自身が道徳教育をより意識し、意図的に道徳教育を実践していくことができるよう、「道徳性育成の視点」を明示した学習指導案を作成し、全学年で授業を実施した。(但し、ホームルーム活動のねらい達成が第一義であることに留意しなければならない。)



【開発教材】

- 「生命に関する写真(人間、豚、牛等)」(第1学年)
- 「命と向き合う～子牛の生と死を通して～」(第2学年)
- 「未来の命を通して」(第3学年)

命と向き合う 子牛の生と死を通して

生舎内の一角に設けられた三メートル四方の分べん室では、出産を二週間後にひかえた牛がいます。名をサツキといい、本校で生まれた一頭生で、今回で三回目の出産を迎えます。

その日サツキはいつもと様子が違っていました。朝からクワンソウ代わりに敷いたみかんなどの敷料の上に座り込み、動こうとせず、息も少し荒いような様子でした。そして、時折足を引っさめるしくさをしています。このしくさは陣痛が始まっている証拠です。

その様子を見て先生たちは、「ずいぶん早いですね。また産前だというのに」「ん、早いですね、おかしいですね」と話をしていました。

今日、八月八日は一年生の総合実習の日でした。いつもの点呼の後、「日は分べんしような牛がいます。運がよければ見られるかもしれませんが、その時また連絡します」と先生から連絡がありました。

そして、それぞれの部門に分かれて実習が始まりました。

分べん室では、いつもの出産と違う様子に先生は、サツキの子牛の中心手を入れ、子牛の状態を確認しました。これは必ずしも「早く産まないと、すぐに獣医さんに連絡を取り、来てもう」ことに。そして、プロジェクトの調査に当て備が始められました。母牛であるサツキの床に直接落ちないよう、わらを厚い子宮から引っ張り出すための助産子。人後の母牛に飲ませる味噌汁が置かれ、新鮮なわらが敷き詰められ、また別の準備されています。

資料「命と向き合う」(一部抜粋)